資料

森のようちえんの理念の紹介

— ドイツと日本における発展とその理念を手がかりに —

今村 光章*・水谷 亜由美**

岐阜大学* はしま西幼稚園**

What Is the Idea of “Waldkindergarten” ?

— Depend on the History and Ideal of “Waldkindergarten” in Germany and Japan —

Mitsuyuki IMAMURA*, Ayumi MIZUTANI**

Gifu University*, Hashima-nishi Kindergarten**

(受理日2011年7月28日)

I はじめに

昨今、「森のようちえん (Waldkindergarten)」(以下では、括弧なしに、森のようちえんと表記する) 活動が注目を集めつつある。だが、日本における先行研究において、歴史や現状、理念についてまとめられたことはなく、世界で最も園の数が多いドイツにおける森のようちえんの紹介も数少ない。そこで、本資料では、森のようちえんの歴史と現状、理念について、先行研究を手がかりにごく簡単に紹介し、基本的な情報提供を行いたい。

最初に、ドイツでの森のようちえんの紹介をおこなう。森のようちえんの発祥の地のひとつとされるドイツでは、3冊の書物 (Bickel 2001, Henkel 2007, Miklitz 2007) をはじめ、日本語に翻訳されたヘフナーの博士論文 (ヘフナー 2009) などの先行研究がある。だが、こうしたドイツの先行研究は、一部が先行研究で日本語に訳出され紹介されているとはいえ、一般向けには翻訳されていない。そこで、主としてこうした文献の紹介をするとともに「自然－森のようちえん連盟 (Bundesverband der Natur- und Waldkindergärten in Deutschland e. V.)」のホームページ¹⁾を踏まえて、ドイツにおける森のようちえんの歴史と現状、理念を概観する (II)。

次に、日本の森のようちえんの歴史と発展、理念についても概観したい。ただし、理念については先行研究が皆無であり、資料が乏しいため本格的な検討が難しいが、それでも各々の森のようちえんの理念を示すパンフレットや森のようちえん全国交流ネットワーク²⁾のホームページを踏まえて、日本の森のようちえんの歴史と発展、理念について簡潔にまとめてみたい (III)。

最後に、こうした情報についてまとめ、森のようちえんの意義を述べる (IV)。

本資料が、これから森のようちえん活動を始めようとする実践者にも、また、既に森のようちえん活動をされている実践者にも有益な情報となることを願っている。

II ドイツにおける森のようちえんの歴史と現状

1. ドイツにおける森のようちえんの歴史

ヘンケルとミクリッツのまとめによれば、ドイツの森のようちえんは、ウルスラ・ズーベ (Ursula Sube) という女性がヴィーズバーデンに創設したのが始まりであるという (Henkel 2007, Miklitz 2007)。1968年に正式な幼稚園の認可を受けたが、当時は広まりを見せなかったという。

だが、その後、1991年にフレンスブルグの教員養成の大学に通っていた2人の学生、ケルスティン・イエブセン (Kerstin Jebsen) とペトラ・

イエーガー (Petra Jäger) の行動がドイツでの森のようちえんの発展のきっかけとなった。彼女らは、デンマークの森の幼稚園の実践に感銘を受け、ドイツでの森のようちえんの構想を作り上げた。1993年、フレンスブルグにおいて、ふたりはドイツ国家によって初めて認可された「フレンスブルグ森のようちえん (Waldkindergarten Flensburg e. V.)」を開園した。イエーガーは、2010年現在でもその森のようちえんの保育者として働いている³⁾。

現在では、森のようちえんは、ドイツ全土で急速に広まり、広く市民権を得るようになってきた。ドイツでは、1996年には、全ドイツ森のようちえん連盟 (Bundesarbeitskreis der Naturkindergärten in Deutschland) が設立され、2000年には、ドイツ全域での規模となった。州規模の連盟は、バイエルン、バーデン＝ヴュルテンベルク、ノルトライン＝ヴェストファーレン、シュレスヴィッヒ＝ホルシュタイン、ヘッセンの各州に設立されている (Miklitz 2007)。こうしたドイツの森のようちえんは市民が自主的に立ち上げた保育のサークルから出発している点は見逃せない。

2. ドイツの森のようちえんの形態と園数

ドイツの森のようちえんには様々な形態があるが、大きく二つに分けることができる。ひとつは「純粋な森のようちえん (Der reine Waldkindergarten)」で、もうひとつは「融合型の森のようちえん (Der integrierte Waldkindergarten)」である。ミクリッツの説明に基づけば、それぞれの形態は、以下のようにまとめることができる (Miklitz 2007)。

まず、「純粋な森のようちえん」とは、幼児集団が午前中ずっと自然の中で過ごす森のようちえんである。自然の中といっても、ドイツの各地域指定された限られた空間である。森のようちえんの活動の場となる森は、交通の便が良く、誰でも出入りができる場所となっている。ドイツでは、この種の幼稚園が“Waldkindergarten”と称され、運営がなされている。

「純粋な森のようちえん」の保育時間は、4時間から6時間程度であり、平日の5日間、毎日行っている。高緯度な地域にある森のようちえんでは、寒い時期に保育時間を短縮し、暖かい時期に延長するなどして、埋め合わせをしている場合もある。1週間に1日か2日、延長保育を行う幼稚園もある。

「純粋な森のようちえん」は、バイエルン州の例外を除き、基本的に園舎を所有しなくてもよいとされている。だが、もちろん避難小屋と呼ばれる場所は設けられている。避難小屋は、改造されたバウワーゲン (Bauwagen) という木の建物が使用されることが多い。この小屋は、嵐や雷雨、霰のような極端な気象状況の場合に使用される。また、工作の材料や大工道具、幼児の予備の着替えなどを保管しておく場所としても活用されている。

森のようちえんの1クラスは、20人までとされている。基本的には3歳から6歳までの幼児を対象としているが、なかには3歳以下の幼児を受け入れている森のようちえんもある。保育者はたいがい2名で指導を行うが、寒い季節は3人体制で保育がなされる。補充される3人目の保育者は、実習生や当番の保護者である。

気温がマイナス6度を下回るような寒い時期には、多くの森のようちえんでは、暖かい部屋で代替プログラムを実施する。そのため、幼児は厳しい寒さに耐えることができ、継続的に保育が施される。

他方、「融合型の森のようちえん」とは、デンマークと同様に、ドイツでもよく見られる形態である。一般の幼稚園に、森のようちえんの教育上の理念が組み込まれている形式である。ドイツでは、様々な形で組み合わされた幼稚園が存在している。

まず、一般の幼稚園のなかで、ほぼ毎日、森で保育を行うグループが存在する。幼児は、それぞれ森での活動を選択して活動を行っている。週ごとに、あるいは月ごとに森のグループのメンバーは交替されている。

次に、森のようちえんと一般の幼稚園が協同し

た形式もある。幼児は、午前中を森の中で過ごし、午後からは一般の幼稚園で過ごすのである。森のようちえんではまかなうことができない時間の保育を、一般の幼稚園と協力することで補っていると言える。

その他にも、森のようちえんの活動を発展させた形式として、森のようちえん週間を設けたり、定期的に森の日を設けたりする形式も存在する。

では、ドイツにはいくつ森のようちえんが存在するのか。ドイツの「自然－森のようちえん連盟」で公開されている各州の森の幼稚園リストをまとめると、各州の森のようちえんの園数は表1のようになる¹⁾。州ごとの順位は図1のようになる。このように、2010年では、ドイツ国内にある森のようちえんの数は、合計488園である⁴⁾。森のようちえんが最も多い州は、Baden-Württembergで102園、続いてBayernが88園、Hessenが67園となっている。最少であったのは、Mecklenburg-VorpommernとSaarlandの1園である。このように、地域によって森のようちえんの数はかなり異なっている。

表1 州ごとの森のようちえんの園数

順位	州 名	森のようちえんの数
1	Baden-Württemberg	102
2	Bayern	88
3	Hessen	67
4	Niedersachsen	64
5	Schleswig-Holstein	52
6	Nordrhein-Westfalen	42
7	Hamburg	17
8	Rheinland-Pfalz	13
9	Berlin	12
10	Brandenburg	10
11	Thüringen	6
12	Sachsen	6
13	Sachsen-Anhalt	5
14	Bremen	2
15	Mecklenburg-Vorpommern	1
16	Saarland	1
合 計		488

図1 州ごとの森のようちえんの園数の順位
(数字は順位を示す)

3. ドイツにおける森のようちえんの理念

森のようちえんでは、一体どのような幼児教育・保育が望ましいとされているのであろうか。次に、森のようちえんの理念について紹介しておく。もとより、ヘンケルの指摘のとおり、森のようちえんでは、保育者は、幼児が自分達のペースで自然に親しみ、自然の移り変わりを感じられるようにと願っており、一方的に画一的な教育方針を決めているわけではない（Henkel 2006）。

それでも、森のようちえんに共通する理念が存在する。ミクリッツは次の12の理念を提示している（Miklitz 2007）。この理念は先行研究でもよく引用される部分であるので示しておくべき資料的価値があると考えられる。

<ミクリッツによる森のようちえんの理念>

①四季のリズム

森のようちえんでは、年間を通して自然の循環の過程を直接的に体験する。

②多様な運動の経験

自然の中で、自分の身体の可能性と限界について知る。

③子どもの五感

子どもの五感、すなわち、触覚、聴覚、嗅覚、

味覚、視覚の全てが多様な自然環境と反応し子どもの心に訴える。子どもの知覚は刺激され、促進されていく。子ども達は、主に自主的な行動、調査、実験、発見、体験について学ぶ。

④心理的な領域の発達

子どもは、理想的な条件のもとで心理的発達が促進される。

⑤こだわりの受容

子どもは、自分の欲求に合わせて作業や観察をし続けることができる。騒音がでたり空間が狭いからといった理由で、子どもの遊びを妨げる要素は森にはない。

⑥想像力の発達

子どもが想像力を自由に発揮できる。

⑦全体的な教育

森のようちえんの全体的教育は、リズムと音楽的教育であり、メルヘンに代表されるような文化財を伝達している。芸術的な発達は、主に自然の素材から生み出されていく。

⑧静けさの体験

子どもが静けさを体験することで、話している言葉や、自然の声にも敏感になっていく。

⑨火、土、水、空気

火、水、空気、土は、人間が生きていく上で重要な基礎である。霞や雪、雨や霧のような自然現象に遭遇し、四つの要素を体験し、かわりを持つことで、子どもは人格を豊かにしていく。

⑩ a) 社会性の教育

グループのどのメンバーも援助者であり、知識の伝達者として必要とされている。お互いに頼り合う存在であることを基本として、グループと個人の社会性を強めていく。

b) 障害を持つ子どもの受容

障害を持った子どもも、受け入れられる。

c) 目立つ行為を行う子どもへの教育

目立つ行為をする子どもも、新たな経験や他の行動パターンを体験することにより、モデルとなる行為を構築する機会が得られる。

⑪健康と免疫力

子どもが、どんな天気の時でも、新鮮な空気の

中で運動をすることで、健康を促進し、免疫力を強くする。

⑫自己と他者・他の物への畏敬の念

子どもが、生命への尊敬の念を抱き、世界、生物の一つとして自分自身を理解し、愛や親密さ、責任といった感情を抱く。

こうした12の理念はやや網羅的であるが、以上のようなミクリッツが示した理念やドイツの森のようちえんのホームページを見る限り、次の三点は中核となるきわめて重要な理念であると考えられる。

それらはすなわち、第一に、年間を通じて、よほどの荒天ではない限り、保育者が子どもと一緒に森へ出かけるということ。第二に、五感を十分に使って活動を行うこと。第三に、子どもの自主性を重要視することである。

Ⅲ 日本における森のようちえんの歴史と現状

1. 日本の森のようちえんの歴史

日本において、森のようちえんという呼び名の活動が展開されるようになったのは、最近のことである。だが、幼児教育に自然体験を取り入れた活動は、1980年ごろから日本各地で行われてきた。たとえば、1983年には、内田幸一が長野県に「子どもの森幼児教室」を開き、幼児を対象とした自然体験を行っている。「子どもの森幼児教室」は、現在では「いづな学園こどもの森幼稚園」となり、四季の自然を生かした保育が展開されている。

自主保育としては、1983年に福永雪子が「幼児グループ つくしんぼ」を設立し、現在まで継続して地域に根差した保育を行っている（福永 2008）。1985年には、相川明子が「青空なかよし会」を設立し、保護者と協力をしながら、自然の中での保育を実践し続けている（相川 2008）。そして、彼らは、現在の日本の森のようちえんの発展の中心的な役割を担っている。

また、森のようちえんに類似した幼児対象の自然体験活動としては、「森のムッレ教室」が挙げられる。「ムッレ教室」は、1957年にスウェーデン野外生活推進協会が始めた野外教育プログラム

であり、高見幸子によって日本に紹介され、日本各地で実施されている。「ムッレ教室」は、「ムッレ」という森の妖精を登場させ、自然を楽しむことと自然を大切にすることを教えることを目的にしている。一日中屋外で過ごし、五感を使って森を感じる体験を促す面は、森のようちえんと共通している。反面、自然環境に関する学びを促すことを目的とし、発達段階に沿った自然科学に基づく教育プログラムが生まれ、意図的に活動が展開される部分は森のようちえんと異なっている（岡部 2007）。

こうした幼児対象の自然体験型環境教育には枚挙にいとまがない。だが、森のようちえんという呼称とその活動が本格的に広まったのは、日本では幼児の自然体験を始めとする体験活動の欠如が指摘されるようになった2005年ごろからである。子ども達の自然体験の不足を危惧する声によって、乳児・幼少期の子どもたちへ自然体験の機会を提供しようと活動する団体や個人が増え、森のようちえんという呼び名の活動が注目を浴びるようになった。全国各地で、幼児を対象とした自然体験教室や自然体験を重視した幼児教育を行っている団体が情報を交換するようになり、活動が広がりを見せている。

2. 日本の森のようちえんの分類

日本の森のようちえんの運営主体は、団体によって様々である。森のようちえん全国ネットワークの分類を踏まえていえば、森のようちえんは、運営主体によって四つに分類できる。

第一に、学校教育法における正式な幼稚園・認可保育園であり、それらは、自然散策や遠足、お泊まり保育、畑の活動などの自然体験活動を実施している。単発的な活動も含まれることがある。

第二に、認可外保育施設やNPO法人、環境教育の個人事務所であり、そこでは自然体験を意識した幼児教育などを行っている。

第三に、市民活動の延長として、自主保育や共同保育、育児サークル、子育てサロン・ひろばを行う任意団体であり、それらは、野外を中心とした自然体験を意識した保育活動を行っている。

最後に、青少年教育施設や社会教育施設、生涯学習を提供する行政機関であり、それらも、年間行事として野外活動プログラムを活かした幼児教育を行っている。

こうした四つの運営母体のなかで注目すべきは、第三の自主的な保育のグループであり、それらが最近では増えている。だが、森のようちえんの運営団体は多彩である。

同様に、主催者も多様である。大別すれば、①幼稚園教諭、保育士、学童保育の指導者といった保育者、②野外活動・自然体験活動プログラムを行う指導者、③行政機関の関係者、④我が子の自然体験の機会を望む保護者、である。複数の主催者が、それぞれの立場から情報提供をしあいながら、協力して日々の森のようちえん活動が展開されている場合もある。また、自主保育や共同保育の形態で保育者が保育をする場合、指導は保育者、運営は保護者が行う場合もある。

こうした分類とは別に、森へ出かける頻度を踏まえて分類すれば、日本の森のようちえんの形態は、①「通年型森のようちえん」、②「融合型森のようちえん」、③「行事型森のようちえん」の3つに分類できると考えられる。順にその形態を確認しておこう。

第一に、「通年型森のようちえん」とは、一年を通して森の中に入り、保育を行う本格的な森のようちえんである。デンマークやドイツで一般的となっている形態であり、純粋な森のようちえんといえる。多くの場合、森の中に避難小屋を持っているが、園舎はない。台風や雷雨等の荒れた天候以外、ほぼ毎日森の中で保育を行うスタイルである。幼児は毎日、森のようちえんに通い、森の自然に囲まれた環境で幼児期を過ごす。自主的な保育のグループや一部の幼稚園・保育所でこうした活動が行われている。

第二に、「融合型森のようちえん」とは、日々の生活を園舎で行っているが、年間を通じて月に数回程度、森へと出かけて活動を行うタイプである。森のようちえんの活動日が設けられ、継続的に同じ森へと出かけていく点に特徴がある。ただし、園外保育や遠足などの行事として、年に数回、

自然豊かな場所に出かける場合は該当しない。統率された幼児のクラス集団での活動が主となり、担任の保育者が中心となって活動が展開される。森へ出かける頻度は第一の「通年型」に比べるとかなり少ない。

第三に、「行事型森のようちえん」は、専用の園舎やフィールドとしての森を所有せず、行事として森の活動を行うタイプの森のようちえんである。自然学校や自然活動団体、NPO法人等が、その都度幼児を募集して行っている。普段は異なる幼稚園・保育所に通う幼児が、土日、祝日に森へと出向き、自然体験を楽しんでいる。年間に数回とはいえ、森のようちえんという名称が付されている場合もある。

さて、こうした森のようちえんの園数とその分布であるが、森のようちえんネットワークに登録している園が66園ある²⁾。それ以外にも森のようちえんは存在し、今後立ち上げるようちえんや、自然学校が実施するものを含めると、ざっと見積もって100程度というところになろう。日本の人口はドイツの2倍程度であること、そして、ドイツが約500園あることを考えれば、日本での普及はまだまだであるといえよう。

3. 日本の森のようちえんの理念

森のようちえんが、保育を行うにあたって大切にしていることは何だろうか。個々の森のようちえんはどのような理念を掲げて活動を行っているのだろうか。まず、森のようちえん全国ネットワークでは、森のようちえんの保育で大切にしたいことを以下のようにまとめている²⁾。

＜森のようちえんで大切にしたいこと＞

○自然はともだち

- ・自然の中で、子ども、親、保育者が、共に育ちあうこと
- ・自然の営みに合わせること
- ・保育や福祉の仕組みを理解し、日本の保育や子育て全体に貢献すること

○いっぱい遊ぶ

- ・自然の中で、仲間と遊び、心と体のバランスの

とれた発達を促す。

○自然を感じる

- ・自然の中でたくさんの不思議と出会い、豊かな感性を育む。

○自分で考える

- ・子どもの力を信じ、子ども自身で考え行動できる雰囲気をつくる。

そのほかに、閲覧・入手が可能であった日本の50園の森のようちえんのホームページやパンフレットを参考に、森のようちえんの理念を考察した。紙数の都合上ホームページやパンフレットの内容やその詳細については別稿にゆずらざるを得ないが、次のような理念や保育の願いが読み取れる。

日本の森のようちえんでは、①比較的ゆるやかな時間の制限のなかで、また、ほとんど空間的には制限されていない場所で、思い切り自由に遊ぶこと、②友達や大人、動植物とかかわること、③五感を使って森の恵みや命を感じることが大切にされている。そのために、保育者と保護者は、ありのままの幼児の姿を受け入れ、幼児の育ちを信じて待つ姿勢を重視している。幼児が遊びを通して本物の体験をし、丈夫な体と豊かな感性、強くあたたかい心、他者と共に生きる力を身につけていくことが期待されている。

さらに、森のようちえんの形態別に理念を分析すると、以下のような特徴がみられた。

まず、「通年型森のようちえん」は、①幼児の自主性を伸ばしたい、②人や生き物を尊重し、共存する態度を育てたいとの願いが記載されていた。幼児の生きる力を育てるため、幼児が自分で考え、自分で判断することが大切にされている。そのため、保育者と保護者は幼児を信じて待つという見守る姿勢を意識しながら保育を行っていることが明らかになった。

また、「通年型森のようちえん」では、日々の自然との触れ合いの中で、いのちを感じる瞬間がある。森の中での様々な動植物との出会いを通して、自然を慈しみ、共に生きていこうとする態度の育ちを望んでいることが読み取れた。さらに言

えば、自主保育の場合、幼児だけではなく、保護者も一緒に育つことが求められている。保護者が保育や運営に携わる特性から、保護者の学びと成長が大切な理念の一つとして挙げられている。

次に、「融合型森のようちえん」では、園舎を持ち、幼稚園生活の大半は園内で過ごす。そのため、保育方針の中に、①戸外遊びを重視したい、②既成のものだけではなく、五感を使って自然を直接感じて欲しいという記述があった。幼稚園での生活の中に、積極的に野外で遊ぶ時間、お散歩に出かける時間を取り入れようとする姿勢が読み取れた。園内に存在する遊具で遊ぶ時間だけではなく、自由に遊びを作り出すことができる自然物を幼児に提供したいとの願いから、森のようちえん活動を取りいれていることが明らかになった。

他方、「行事型森のようちえん」の場合、森の中での活動は非日常的なものと捉えられがちである。したがって、森のようちえん活動の根底にあるのは、①幼児の遊び場、時間、仲間の提供と②子育て支援の場の提供である。普段の生活の中では経験することが難しい自然体験の機会を補う役割が、「行事型森のようちえん」に求められている。幼児だけではなく保護者も心を癒し、同じ立場の保護者と交流を図る場としての意義があることも明らかになった。

また、自然学校が運営を行っている場合では、自然体験学習の視点が取り入れられている。幼児の心身の発達に加え、自然との付き合い方を考えるきっかけを与えようとしていると看取できる。自然学校は、幼児だけでなく、小学生や中学生、そして大人も対象に自然体験活動の場を提供していることが多い。幼児の自然体験を援助する指導者の養成を行っている場合も多い。従って、森のようちえんに参加した幼児が幼児期に経験した自然とのかかわりを基盤にし、やがて大人になった時、自然体験や野外教育、環境教育を行うリーダーとなることを願っていると考察できる。

以上のように、日本の森のようちえんは、自由に遊びこむこと、動植物や他者とかかわること、および、五感を使って自然や命を感じることを理念としている。遊びを通して培われる心身の発達

を願いながら、各々の森のようちえんの環境や幼児、保護者に合わせて活動を展開していることが明らかになった。

Ⅳ まとめ

本資料では、ドイツと日本における森のようちえんの歴史と現状、理念を整理した。繰り返すようだが、森のようちえんの理念を簡単にまとめておこう。

ドイツの通年型の森のようちえんでは、①年間を通じて、ほぼ毎日、森へ出かけ、②五感を十分に使って活動を行い、③自主性を重要視するという理念がみられる。

他方、日本の森のようちえんでは、①自由に遊びこむことを大切に、②動植物や他者とかかわりながら、③五感を使って自然や命を感じるということを理念としているように見受けられる。もちろん、森のようちえんのタイプによっても理念は異なるばかりか、こうした理念がどれだけ現実化されているかについては、今後の研究の成果を待ちたい。

本資料では、冒頭に示した4冊のドイツ語の先行研究とホームページ、並びに、日本の森のようちえんのパンフレットなどを一次資料として用いたため、調査には限界があり、あいまいな部分も多い。それでも、森のようちえんに関する一定の情報提供はできたと信じたい。

お断りするまでもないが、こうした資料の目的は、あくまでも情報提供にあり、森のようちえんの理解を狭く限定する意図はまったくない。もちろん、個々の幼児対象の環境教育活動について、それが森のようちえんという名称にふさわしい活動であるか否かを判断するものでも決してない。そうしたことについては今後の本格的な議論を待ちたいが、市民の環境教育活動として森のようちえん活動には一定の意味があることを共通の理解としたい。

最後に、こうした資料を踏まえて、森のようちえん活動がさらに活性化することを願いたい。それと平行して、日本の幼稚園と保育所の幼児教育の現場で、比較的ゆるやかな時間と、ほとんど空

間的には制限されていない場所で、思い切り自由に遊び、しかも、友達や大人、動植物とかかわりながら、五感を使って森の恵みや命を感じることができる時間が大切にされていくようにとも願いたい。

そのことによって、現在主流となった幼児教育の活動への反省契機がもたらされることにも少なからず意義があるように考えられる。

註

- 1) Bundesverband der Natur-und Waldkindergärten in Deutschland e. V. HP
<http://www.bundesverband-waldkinder.de/>
(2010年12月15日アクセス)
- 2) 森のようちえん全国ネットワーク HP
<http://www.morinoyouchien.org/>
(2010年11月30日アクセス)
- 3) Waldkindergarten Flensburg e. V. HP
<http://www.waldkindergarten.de/index.php>
(2010年12月15日アクセス)
- 4) 園の数は論文執筆時のものであり、2011年6月現在では、園の数は約650である。

引用文献

- 相川明子, 2008, 『土の匂いの子』, コモンズ, 東京, 118pp.
- Bickel, K., 2001, Der Waldkindergarten: Konzept, Pädagogische Anliegen, Begleitumstände. Praxisbeispiel Wyk auf Föhr, NormanMedia, GERMANY.
- 福永雪子, 2000, 『泥んこで風とあそび街を歩く: 屋根のない「つくしんぼ」保育の日々』, 教育史料出版会, 229pp, 東京.
- ペーター・ヘフナー (佐藤竺訳), 2009, 『ドイツの自然・森の幼稚園: 就学前教育における正規の幼稚園の代替物』, 公人社, 東京, 157pp.
- Henkel, S., 2007, Waldkindergärten in Deutschland-Ist diese Reformpädagogik eine Alternative in der Vorschulerziehung?, GRIN Verlag OHG, GERMANY.
- Miklitz, I., 2007, Der Waldkindergarten: Dimensionen eines pädagogischen Ansatzes, (3. Aufl.) Scriptor Verlag, GERMANY.
- 岡部翠編, 2007, 『幼児のための環境教育: スウェーデンからの贈り物『森のムッレ教室』』, 新評社, 東京, 256 pp.